

MAFF ナビ いわて

東北農政局 岩手県拠点
令和6年6月

本紙は、農業や食料に関する情報をデータで提供し、農業関係者から消費者まで、多くの皆さんが農産物の生産・消費に興味を持ち・考えていただく材料として発信しています。内容については、農業・農村をとりまく情勢を多様な目線から分析し分かりやすくしたものです。

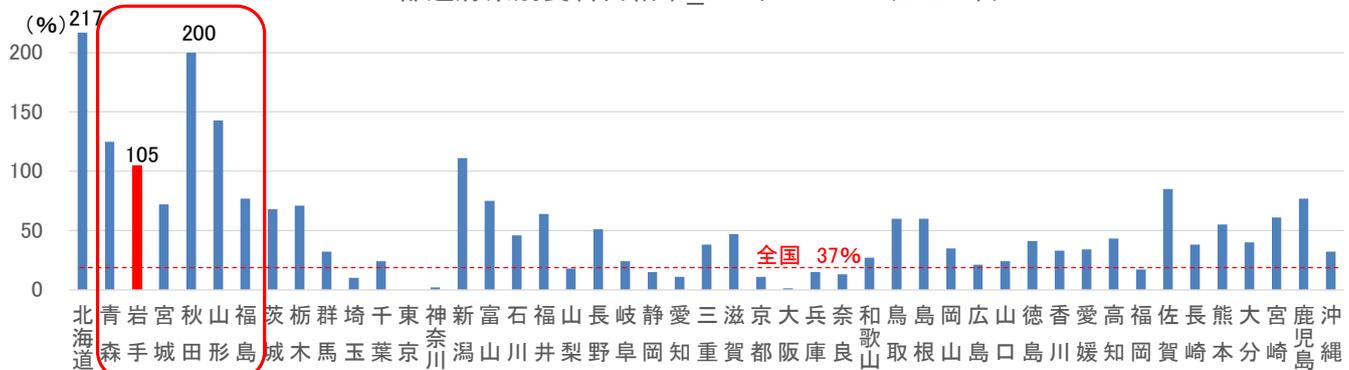
なお、紙面中の試算値は独自に試算した値ですので、参考として活用いただくようお願いします。

今回は、「食」をテーマに取り上げ、自給率の向上について考えることとしました。耕作放棄地の解消に向けた農地の利用や県内の自給率向上を考える材料としていただければ幸いです。

1 東北の食料自給率の状況

東北は日本の食料供給基地として農産物の生産が盛んに行われ、各県の食料自給率は全国平均を大幅に上回っています。岩手県の食料自給率（カロリーベース）は「105（2020年）」と全国第6位となっています。

都道府県別食料自給率_カロリーベース(2020年)

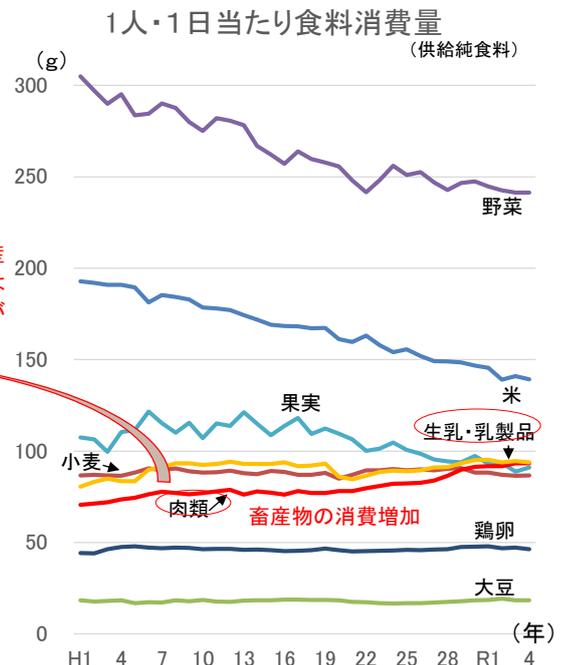


資料:食料需給表

2 食料消費の状況

近年の食料自給率は、日本人の食生活の多様化により、国産で需要を満たすことのできる「米」の消費が減少し、飼料の多くを海外に依存している「畜産物」が増加していること等により、長期的には減少傾向となっています。

そのような状況から、国産飼料の増産に取り組んでいるところですが、農地の少ない日本での自給には限りがあります。



農産物輸入量面積換算



畜産物を生産するためには多くの農地が必要

輸入農畜産物を全て国内で生産するためには新たに2倍の農地が必要

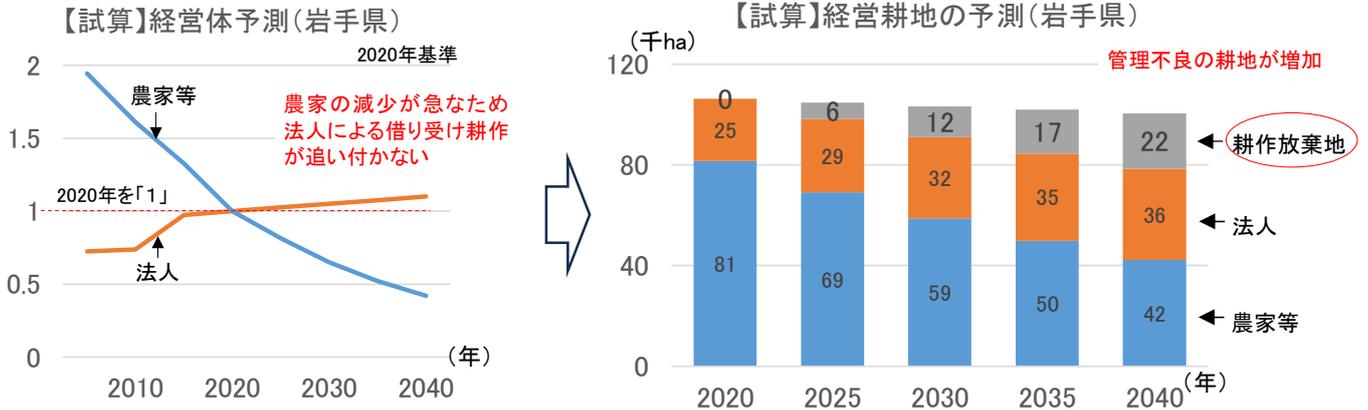
資料:「食料需給表」「耕地及び作付面積統計」等を基に農林水産省が試算

3 食料生産基盤の状況

農地については、法人等大規模経営体への集約が進んでいることから、法人が管理する農地の割合が上昇しています。

これは、離農した農家等の耕地を法人が借り受け耕作しているためですが、受け手の法人についても担い手不足等の課題を抱えている状況であり、今後の更なる規模拡大は厳しい状況となっています。

このような中で、農家等の離農減少ペースが法人設立ペースを上回る速度で進むと推測されることから、これまで以上に耕作放棄が進むことが懸念されます。



※2015年と2020年の農林業センサスにおける経営体(経営耕地面積)の増減率の幾何平均(1/5乗)により、経営形態ごとの「年平均増減率」を求め、これを用いて、2020年経営体数(経営耕地面積)の数値を基に予測値を算出(東北岩手県拠点試算値)

4 県内自給率アップ及び耕作放棄解消について考える

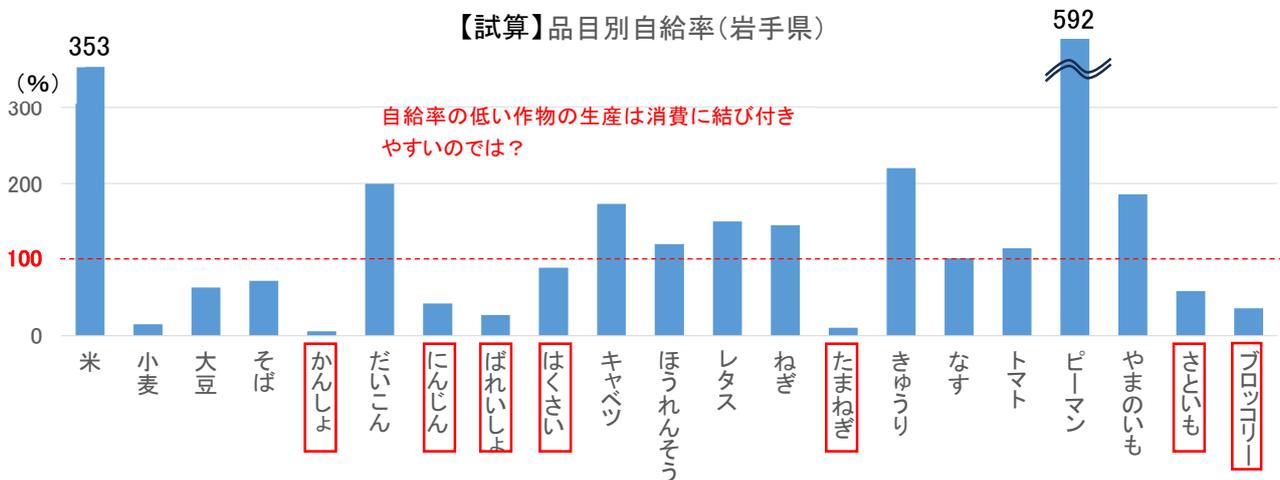
上記までの状況から、少しでも農家が収入を増やせる作物を作付けし、耕作放棄地の減少及び岩手県の食料自給率アップに結び付けるため、以下の試算をしてみました。

(1) 試算① 作物ごとの自給率

「県内で生産された作物で県民の食を賄うことができるか」の観点から、作物ごとの自給率を試算しました。

岩手県の食料自給率は米が大きく引き上げている一方で、予想した以上に100を下回る作物が多いと感じます。

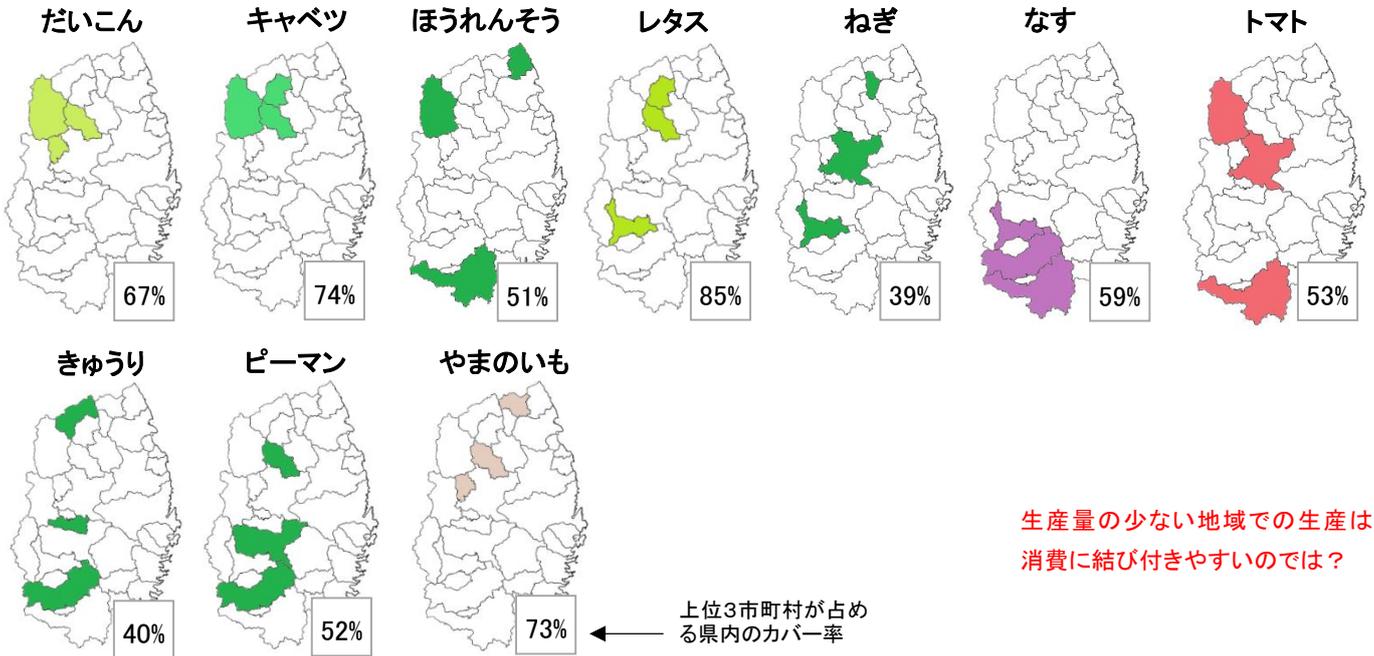
県内の需要を満たしていない作物の生産を増やし、近場の販売先(産直等)を確保することで、県内自給率をアップすることができるのではと考えます。



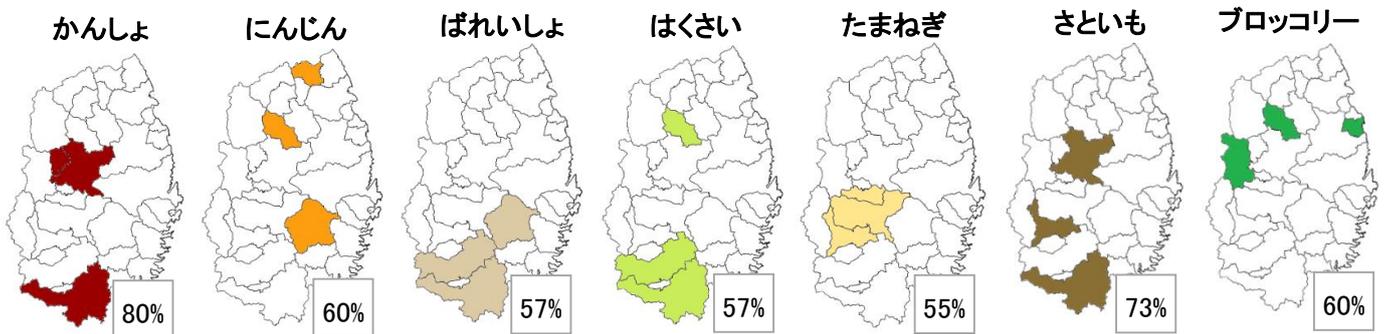
※ ①米・小麦・大豆は、食料需給表(R4)を基に国民1人当たり供給量を算出。そば及び野菜は、作物統計(R4)及び財務省「貿易統計」(R4)を基に国民1人当たり供給量を算出(東北岩手県拠点試算値)
②品目別自給率は、作物統計から県民1人当たり供給量を算出し、①の国民1人当たり供給量で除して算出(東北岩手県拠点試算値)

消費に比べて生産量が少ない場所の目安として、各作物の産出額上位3市町村を図解し、当該市町村における県内カバー率（金額ベース）を試算しました。

県内自給率100%以上の作物



県内自給率100%未満の作物

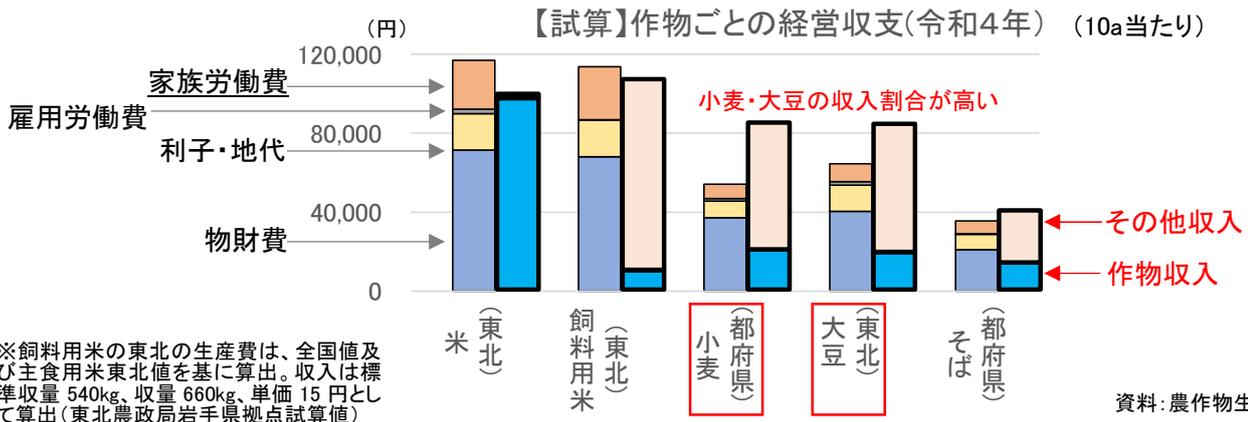


資料：市町村別農業産出額(R4)

(2) 試算② 作物ごとの経営収支

「単位面積当たりの収入」の観点から、田に作付している主な作物について収支を比較してみると、小麦・大豆・そばは、その他収入（交付金等）で収支がプラスとなります。

また、米（飼料用米含み）はマイナス収支となり、家族労働費分を考えなければプラスとなる構図となっています。



<参考> 営農類型別農業経営収支（個人1経営体当たり）

生産費調査を行っていない野菜については、参考として主要作ごとの経営体の収支を比較することとしました。これは、水田作、畑作、野菜作の経営体について1経営の総収支を比較したものです。

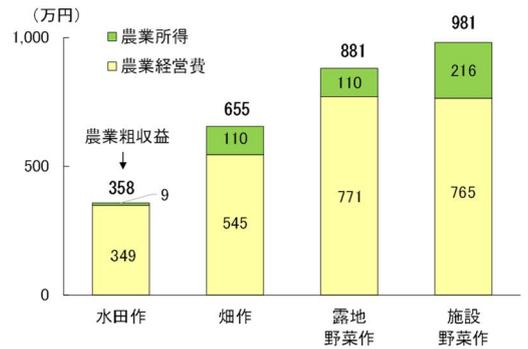
水田作は、水田に米・麦・大豆等を作付けした経営体を集計したもので、主な作物は水稲となります。

畑作は、畑に麦・大豆・そば・なたね等を作付けした経営体を集計したもので、主な作物は小麦・大豆となります。

農業所得を比較すると、施設野菜を主とする経営体の所得が高く、所得率では、小麦・大豆を主とする畑作経営体が高い状況となっています。

営農類型別農業経営収支（個人1経営体当たり）

（令和4年：東北）



	水田作	畑作	露地野菜作	施設野菜作
所得率 (%)	2.4	16.8	12.5	22.1

水稲を主とする水田作の所得率は低い

資料：営農類型別経営統計

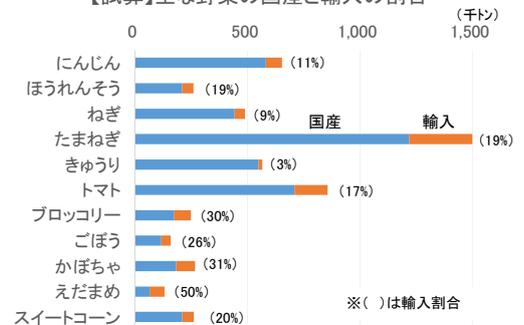
(3) 試算③ 輸入の占める割合が多い野菜

「輸入割合の高い加工・業務用野菜の国産割合向上」の観点から、野菜の輸入状況を見ると、たまねぎ・トマト・ブロッコリー・えだまめの輸入量が多い状況となっています。

農林水産省では、輸入している加工・業務用野菜の国産への切り替えを目指しています。

野菜の輸入は、冷凍加工や業務用が多い

【試算】主な野菜の国産と輸入の割合

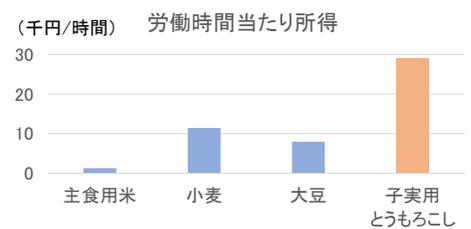
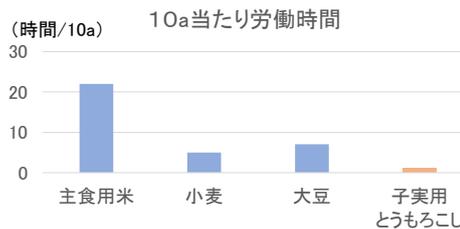


資料：財務省「貿易統計」及び作物統計
※令和4年産野菜の収穫量と同年輸入実績から算出（東北農政局岩手県拠点試算）

(4) 試算④ 子実用とうもろこしの労働時間

「単位面積当たりの労働時間」の観点から、広い面積を要する米・麦・大豆と子実用とうもろこしの労力を比較しました。子実用とうもろこしは、面積当たりの労働時間が少なく、労働時間当たり所得は高い状況となっています。

国産飼料の自給率アップに向け、子実用とうもろこしの生産を検討してはいかがでしょうか。



資料：野菜・果樹、子実用とうもろこしの生産拡大

農地の有効活用について考える材料としてご活用ください。
また、農林水産データの活用支援を行っています。遠慮なくご相談ください。

～ 見える化 ～

生産者の皆さんの環境負荷低減の取組を「見える化」する取組です。消費者の皆さんがこのラベルを「見て」、環境負荷低減に資する農産物を「選べる」という願いが込められた「みえるらべる（名称）」です。

https://www.maff.go.jp/j/press/kanbo/b_kankyo/240614.html



～ ニッポンフードシフト ～

「食」から「農」について自ら考えることで、将来の「食」「農」を守っていく取組で、主にZ世代の若者をターゲットとし、様々な情報を発信しています。

<https://nippon-food-shift.maff.go.jp>



東北農政局岩手県拠点
岩手県盛岡市盛岡駅前北通1-10
019-624-1125

